



白川・山本家に伝わる 「御用細工場」の高札



(山本大介家蔵)

昨年末のことでした。れきみん応援団の八尋さんが白川の山本大介家（株式会社華山社長）に伝わる高札の写真を持参されました。それには「御用細工場二付細工人外出入無用之事 元治二年（1865）丑五月 会所」という文字が墨書されていました。そういえば以前、この札の写真をどこかで見た記憶がありましたので探したところ、昭和34年（1959）に発行された『古伊萬里』に掲載されていることを確認しました。ただし、そこには所蔵者に関する記載はなく、「参考図 御用細工人以外の禁制の札」とありました。

しかしながら昭和11年（1936）発行の『肥前陶磁史考』には、明治30年（1897）に没した白川の窯焼き・山本柳吉の欄に次のように記録されています。

「巨器の角物制作に於いては独歩の名人でもあった。当時未だ石膏の使用など知られぬ時代とて、彼は粘土を板状に伸べ之を継ぎ合わせて大燈籠を製作した。嘗て藩主閑叟（注：十代佐賀藩主鍋島直正）が青花の大燈籠製作を命ずるや、自ら夫人と共に、柳吉の工場へ臨場せしことあった」とあります。

この記事から、藩主より注文された大燈籠を製作していた時期に、山本家の工房前にこの高札が掲げられていたことが推察できますが、60年ほど前に『古伊萬里』の編集者は実見しているはずなのに、なぜかそこに所蔵者を記載していませんでした。改めて中島浩氣さんの調査研究と考察力のすごさに脱帽です。

ちなみに、このころの直正公は胃病に苦しんでいて、『鍋島直正公傳』によれば元治元年（1864）4月8日から塚崎温泉（現在の武雄温泉）に転地療養しています。この直正公の胃病について同書によれば、元々神経質な上に早食いが原因であったと記されています。侍医の大石良英は食物をよく咀嚼し唾液を加えて嚥下

するように進言し、さらには給仕の者と談話しながら箸を進めるようにと伝えています。今も昔も、よりよい食事というものは変わらないものだと思います。

『鍋島直正公傳』を見る限り、藩主として有田皿山に來たということは確認できませんが、湯治で小康状態となった折、少し足を延ばして有田を訪れたことは十分考えられます。

実は鍋島家の人々が有田皿山を訪れた例は他にもあって、大樽の川内家文書の中に「未二月八日 若殿様御越御本陣 久富与次兵衛」や「恒姫様御越二付左之通相心得候様」という記載があります。川内家は元々中の原在住の商家で咄（おと）という村役を務めており、代官所と遣り取りした文書や商取引の書類などが残っています。そこには藩主の家族を迎えるにあたって、往還筋に巻き砂（白砂）をし、隅々まで掃除を行うことや近辺の者は静かに過ごすようになど細かな指示が書かれています。

また、白川の窯焼き・久保家資料には明治20年（1887）7月1日付けで白川組を設立し、組長が久保時太郎、事務係を山本柳吉、支配人を深川常蔵の各氏が務めたとあります。下白川窯跡の所にあった登り窯を使用していたと思われ、年代は不明ですが、前述の窯焼きのほかに竹重良助、深川忠次、蒲原相吉、大串庄之助各氏の名もあります。柳吉さんがそうであったように、代々、大物づくりを得意とした窯焼きであった山本家に高札が残されていたのは、江戸時代後期に佐賀藩の御用製品を製造していた窯焼きの証しでもあります。

いずれにしても、貴重な資料がまだまだ有田には残されているということを実感できる資料の確認でした。皆様のお宅にも“歴史の証人”が残されていませんか？

(尾崎 葉子)

皿 季刊 山

No.109

春
2016

有田町歴史民俗資料館・館報

有田焼創業400年事業(佐賀県プラン)に伴う 山辺田遺跡の発掘調査



fig.01 山辺田窯跡と山辺田遺跡の近景

これまでの発掘調査の経緯

有田は、今年有田焼創業400年の節目の年を迎えました。現在、その記念事業が国の内外で実施されていますが、今回ご紹介する山辺田遺跡の発掘調査も、同様に佐賀県の補助金により有田町教育委員会が調査主体となって実施している事業です。平成26・27年度に現地調査を行い、平成28年度にはそれ以前の調査分も含めて整理作業を進め、発掘調査報告書を刊行する予定です。

この事業は、「有田焼の初期色絵磁器の創始と展開の検証」を目的としており、具体的には、山辺田遺跡の発掘調査を通じて、江戸時代初期の赤絵窯や工房跡等の確認を目指すこととなっています。山辺田遺跡は、これまでの発掘調査等によって、主に出土遺物の点では、北側の丘陵斜面に隣接する国指定史跡山辺田窯跡に関わる工房跡であることがほぼ間違いない状況となっていました。

山辺田窯跡は、今日では一般的に“古九谷”と称される、重厚な緑や黄色をはじめとする寒色系の上絵具を多用した、最初期の色絵大皿などの主要な生産窯としてよく知られています。この“古九谷”の名称は、大正～昭和の前期頃までは、石川県の九谷で生産されたと考えられていたことに起因しますが、現在では、生産地とは無縁の単純に製品のスタイルを示す呼称となっており、正確には“古九谷様式”の製品ということになります。しかし、当然のことながら、本焼き窯用の登り窯跡である山辺田窯跡の発掘調査で出土するのは、色絵を施す前の色絵素地がほとんどで、染付を伴う素地はともかく、無文の白磁を素地とするものなどは、完成品がどのようなものになるのか、ほとんど分からない状態でした。そのため、色絵を施す前の素

地の状態で九谷に運ばれ、そこで色絵を施したとする説などもまことしやかに語られていたのです。こうした状況において、平成4年度の工事の際に多量の色絵や素地が出土、平成10年度には発掘調査によって正式に山辺田遺跡の存在が確認されました。また、平成25年度に再度調査を行い、本事業による平成26年度調査までの間に出土した色絵磁器片は、実に700点ほどにも及んだのです。また、絵具を擦った際の使用痕の残る内面の摩耗した乳鉢や赤絵窯の構築部材など、工房跡を窺わせる資料なども出土していました。こうしたことから、今年度調査では、事業の目的である赤絵窯跡の発見や確実に工房跡と分かる遺構の発見が期待されていたのです。

今年度調査の概要

今年度の発掘調査は、平成27年11月4日から平成28年1月上旬まで実施しました。本来は12月の中旬までを予定していたのですが、あいにくの雨続きの天候で、なかなか予定どおりに進みませんでした。調査地点は、一昨年度や昨年度とほぼ重複する場所ですが、その際に点々と試掘した場所以外を全面的に行っています。全体で約250㎡ほどの面積ですが、調査期間の関係で、事業の趣旨である色絵磁器の焼かれた1640



fig.02 今年度の調査区全景

～50年代の土層を中心に調査を行っており、遺跡の成立した1600年代から1630年代頃の土層については、一部しか手を付けることができませんでした。

今回の調査では、陶石を粉砕した白砂が一面に堆積した場所や“オロ”跡、赤絵窯跡など、上絵付け工程まで含む工房跡であったことを立証する遺構が発見されました。色絵磁器も、まだ水洗いが終わっていないためはっきりとした数は分かりませんが、現段階までですでに100点近く確認しています。

“オロ”は、陶石を粉砕し、水簾（すいひ）してきたドロドロの粘土を入れて、さらに水分を抜くための施設です。今回は2か所発見され、長方形や楕円形に近い形状に地面を掘り、そこに全体に黄色い粘土を薄く貼って、その中に磁器用の白い粘土が入れられていました。同様な遺構は、18世紀後半～19世紀前半頃のものとしては、窯焼き（製陶業者）の工房跡である中樽一丁目遺跡でいくつか発見されていますが、より古い17世紀前半頃の遺構としては今回がはじめてです。



fig.03 オロの発見状況

赤絵窯は、丘陵斜面に築かれた大規模な本焼き用の登り窯とは異なり、工房の中に設置された色絵焼成用の小規模な窯です。今回発見された赤絵窯は、排水を良くするためか古い窯の廃材を新しい窯の床下にびっしりと埋め込んでおり、何度か窯が造り替えられたことは確認できました。ただし、ほぼ全壊に近い状態で、詳しい構築状況等は不明でしたが、そこに赤絵窯が位置していたことだけは間違いありません。



fig.04 赤絵窯の発見状況

もっとも、出土した窯壁片をはじめとする構築部材などから、おおむね構造の復原は可能です。有田では昭和前期まで用いられていた薪を燃料とする赤絵窯が知られていますが、外形的には類似していたものと推測されます。天井のない円筒形の本体の一方に方形の焚き口が取り付けられるもので、煙管形窯なども形容されます。本体は外窯と内窯の二重構造となっており、焚き口から燃料の薪を投入すると、内窯の底を熱して、外窯と内窯の隙間から熱や炎が上に抜ける仕組みになっています。

両者の違いは、近代の赤絵窯の場合、外窯と内窯が一体化した構造ですが、山辺田遺跡の場合は内窯が素焼きの甕状を呈しており、適宜取り外せるようになっていたことです。こうした脱着式の内窯片は、17世紀後半の赤絵屋跡である赤絵町遺跡（有田郵便局地点）や幸平遺跡（上有田警察官駐在所地点）でも多く出土しています。ただし、こうした遺跡でも17世紀末頃を境に内窯片が皆無となることから、有田全体に及ぶ上絵付け工程の完全分業化を機に、外窯と内窯の一体化した赤絵窯へと変化したものと推測されます。

このように、山辺田遺跡の発掘調査によって、多くの色絵磁器片が発見され、また、それを生産した工房跡であったことも確実に became clear. ただ、これまでの発掘調査は、山辺田遺跡のごく一部に過ぎません。周辺には、さらに多くの工房跡や色絵磁器片が埋まっているに違いありません。今後整理作業の進展に伴い具体的な遺跡の性格や位置づけが明確になってくるものと思われませんが、さらに将来的に発掘調査が進めば、より初期の色絵磁器生産の状況が明らかになってくることは間違いありません。（村上伸之）



fig.05a 移築した近代の赤絵窯（有田町歴史民俗資料館）

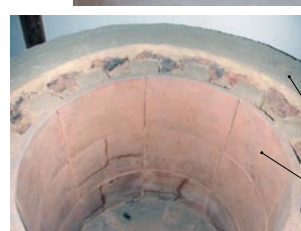


fig.05b 赤絵窯の上面



町屋で昔話を聞く会 開催しました

平成28年2月20日(土)、恒例となった表記の会を有田町公民館と共催で開催しました。会場は上幸平にある小路庵で、話者は1回目から担当していただいているボランティアの「ひこうせん」の三人の皆さん。今回は、先日の佐賀県立有田工業高等学校の卒業制作展の折、デザイン科3年生の宮崎雅子さんが制作した絵本で、有田焼を題材にした「とうせきさんのだいへんしん」、「こまいぬのだいぼうけん」など、有田焼創業400年の年にちなんだ選書をしていただきました。

当日はあいにくの雨模様でしたが、参加してくれた



24人の子ども達は初めて聞くお話に興味深そうに聞き入っていました。お話が終わったあとは、雨もあがり町中で開催されている「パッチワークで伝える有田」の会場やお雛さまを見学しました。



有田異人館が動きました

有田町では、明治時代に有田焼の買い付けに訪れた西洋人をもてなした「有田異人館」(幸平)の保存修理事業を進めています。県内で最も古い擬洋風の建築物で、佐賀県重要文化財に指定されています。

有田異人館は、佐賀藩から許可を得て一時、有田焼の海外貿易を独占していた豪商・田代紋左衛門の子息・助作すけさくによって、明治9年(1876)に建てられました。寄せ棟造りの木造2階建てで、ステンドグラスやらせん階段がある一方、畳や和紙を使った和洋折衷になっています。

建築当時は、有田焼が欧米の万国博覧会に出品され、輸出が盛んだった時期で、田代家に残された文書にも、外国から来た商人が宿泊した記録があります。

建物は、住宅として使用するため昭和の時代などに増改築されていましたが、今回の保存修理事業で、増改築部分を取り除き、失われた部分を復原しています。

今回行った作業は、前庭の復原に必要な空間を確保するために、建物を数メートル移動させる必要があったため、1月9日(土)に曳き家作業を行いました。曳き家作業は、最近ではとても珍しいため、多くの方に見てもらえるように見学会を開催しました。

約40人の町民の方が見守るなか、専門の業者が、金属製の筒約100個を敷いて、土台から上を滑らせ、東に1メートル、南に3.6メートルほど移動させました。建築当時に近い姿に復原し、今年10月頃に保存修理を完成させる予定です。(池田 孝)

※建物内部の公開は、平成29年4月の予定です。



季刊『皿山』

通巻109号(平成28年3月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185

URL: <http://www.town.arita.lg.jp/main/169.html>

※URLが新しくなりました